ローレライ

2005(平成17)年1月25日鑑賞〈東宝試写室〉 ★★★★★

監督＝樋口真嗣／製作＝亀山千広／原作＝福井晴敏／出演＝役所広司／妻夫木聡／柳葉敏郎／堤真一／香椎由宇／石黒賢／ピエール瀧／小野武彦（東宝配給／2005年日本映画／128分）

……遂に『ローレライ』を観た！　時は1945年8月。広島・長崎に続く3発目の原爆は……？　右往左往する上層部をよそに、「ローレライシステム」を積んだ日本帝国海軍の潜水艦、伊507は、祖国を守るために敢然と立ち上がった。CG嫌いの私だが、こんな戦争映画（？）は別。スクリーンいっぱいに広がる伊507とアメリカ海軍太平洋艦隊との死闘に興奮！　そして戦後60年の節目となる2005年初頭にふさわしい力作に感動！　途中思わず涙ポロリのシーンも……。公開は3月5日。多くの人たちがこの映画を観て、日本国中が興奮と感動に包まれることを期待したい。

日本での本格的潜水艦映画は50年ぶり……？

「潜水艦映画に外れなし」と言われるように、『眼下の敵』（57年）、『U・ボート』（81年）、『レッドオクトーバーを追え！』（90年）、『U‐571』（00年）、『K‐19』（02年）など名作は多い（『シネマルーム2』97頁参照）。そして私は観ていないものの、日本映画にも『潜水艦ろ号　未だ浮上せず』（54年）、『潜水艦、イ‐57降伏せず』（59年）がある。しかし、これらはいずれも約50年前の日本映画。戦後60年間平和を享受してきた日本でも、9・11テロ、アフガン戦争、イラク戦争と国際情勢が変化していく中、少しずつ自衛隊の海外派遣問題が現実的な議論となり、いよいよ本格的な憲法改正の議論が始まろうとしている。日本映画では、1960年代には『日本のいちばん長い日』（67年）、『連合艦隊司令長官・山本五十六』（68年）、『日本海大海戦』（69年）など本格的な戦争映画が次々と作られ、お盆のシーズンには毎年これが上映されていたものだ（2004年8月13日付産経新聞

That's なにわのエンタメ「59回目の夏、『戦争モノ』を」参照）が、今は、日本が作るそんな本格的戦争映画はなくなっている。ましてや、企画が生命ともいえる潜水艦モノの日本映画などは夢のまた夢だったが、遂にそれがこの『ローレライ』によって実現した！

原作と映画の共同企画は超異例！

この映画は、原作と映画が共同企画されたという異例のもの。すなわち2000年夏に『亡国のイージス』で絶賛された作家、福井晴敏と、この映画の樋口真嗣監督が映画用のオリジナル・ストーリーを共同で考案し、それぞれ小説と映画で発表するという企画を立ち上げたことがこの映画の出発点になったわけだ。小説と映画の両方を共同して企画するとは、きわめて異例であるだけでなく大胆な試みだったが、まず福井晴敏の小説は『終戦のローレライ』として2002年12月に発表されて、吉川英治文学新人賞、日本冒険小説協会大賞を受賞するなど大ベストセラーとなった。それは2005年３月５日に公開されるこの映画の大きな援軍になるはずだ。しかもこの映画は、数年前から定着している、いかにも日本的でケチ臭い「製作委員会方式」ではなく、フジテレビと東宝が巨額の製作費をドーンと負担して製作したものだ。映画用のオリジナル・ストーリーを考えたうえで小説と映画でこれを同時発表するという方式が成功すれば、そりゃすばらしい。

２時間８分によくまとめたもの！

この映画は２時間８分だが、小説は単行本では上下の２冊に、文庫本では４冊に分かれており、かなりの長編。私は東京と横浜への出張の際、「のぞみ」の車中でビールを飲みながらこれを読んだが、正直言って全部をきちんと読むのはしんどい小説……？　面白いことは面白いのだが、早く全体の大筋をつかもうとしてしまう私のような性分の人間には、１つ１つの章の描写が詳しすぎる感じで、ちと重荷……？　こんな長編小説をどのように映画化するのかと思っていたら、映画では小説で詳しく描かれている部分を大胆にカットしている。そのうえ登場人物も、①絹見真一艦長（役所広司）、②折笠征人特殊潜航艇正操舵手（妻夫木聡）、③田口徳太郎掌砲長（ピエール瀧）、④岩村七五郎機関長（小野武彦）、⑤

時岡纏軍医長（國村隼）等の「骨格」は維持しているものの、大幅に縮小・変更させている。その典型は、元ナチス親衛隊士官、フリッツ・S・エブナー。小説では彼が重要な役割を果たすが、映画では全く登場しない。また、映画と小説とで全く異なる人物が高須成美（石黒賢）だが、その果たす役割は映画を観てのお楽しみ！　また、小説では航海長として登場する木崎茂房が、映画では同名で先任将校（副艦長）役（柳葉敏郎）として登場するのも面白い……。

戦闘シーンや潜水艦モノにはCGもOK！

近時のCG（コンピューター・グラフィックス）の進歩は特撮技術の発展とあいまって映画を変えてしまった感がある。『マトリックス』（99年）をはじめとするCGをふんだんに使ったワイヤー・アクションと、『スパイダーマン』（02年）をはじめとする特撮は、ある意味で映画をつまらないものにしてしまったと言えるほど。しかし、CGや特撮がすべてナンセンスというわけではない。それらは使い方によっては映画のストーリーをどこまでも膨らませてくれるうえ、ありとあらゆる映像をスクリーン上に作り出してくれる貴重なテクニック。私が思うにこのCGが最も威力を発揮するのは大規模な戦闘シーン。昨年のアカデミー賞最多となる11部門にノミネートされた『ロード・オブ・ザ・リング―王の帰還―』（03年）の戦闘シーンなどがその典型だ。また、今年2月5日に公開されるオリバー・ストーン監督の超大作『アレキサンダー』の戦闘シーンでもCGが多く使われているとのこと。逆に、CGを使わずホンモノの迫力ある戦闘シーンをスクリーン上に見せてくれた韓国の映画が『武士（MUSA）』（01年）だが、そうそうすべての映画に生身の人間の「肉弾戦」を求めるわけにもいかないだろう。

そして、潜水艦モノでは、当然、潜水艦VS潜水艦あるいは潜水艦VS地上艦船（主として駆逐艦）との戦いが描かれるから、これをどのようにスクリーン上に描き出すかがその映画の出来、不出来を分けることになる。もちろんホンモノの船に魚雷をぶち当てて爆発させるわけにはいかないから、『タイタニック』（97年）や『マスター・アンド・コマンダー』（03年）のように、巨大なプールの上に模型の船を浮かべるのも1つのやり方。そして、迫力ある生々しい映像をスクリーン上に作り出すについては、CGも当然重宝すべきテクニックの1つだ。私

がワイヤーロープを多用したCGによるアクションが嫌いなのは、それがあまりにも現実離れした世界になってしまうから。しかし、潜水艦の戦いをスクリーン上に表現するには、CGは重要な表現手段。したがって戦闘シーンや潜水艦モノにはCG嫌いの私もCGの活用はOKだ。

伊507とUF 4

旧日本帝国海軍が保有していた潜水艦には、伊号（大型）と呂号（小型）があったこと、そして伊号潜水艦の500番代は外国から接収した潜水艦につけられたナンバーであったことは、私のような古い人間はよく知っている知識。したがって、伊507とは日本海軍が接収した7番目の潜水艦という意味だ。小説を読んで驚いたのは、この伊507の前身はドイツの潜水艦の「UF 4」だということ。第1次世界大戦で華々しい活躍をして相手国を恐れさせたドイツの潜水艦が「Uボート」と呼ばれていたことや、この「Uボート」が第2次世界大戦でも当初は大きな威力を発揮したことはよく知られている。そのドイツのUボートの艦名が「UF 4」と名付けられたのは、フランスから接収した4番目の潜水艦だったため。

小説の『終戦のローレライ』によれば、伊507という潜水艦の由来が詳しく描かれているが、映画ではそういうややこしい話は1シーンないし1セリフだけでケリ。また小説の中では、「ローレライ」とは何かが明らかになるまでにかなりの頁数が割かれているが、映画ではそれも意外にアッサリと……？

ローレライとは？

潜水艦が水中に潜った場合、その位置を知る唯一の方法はアクティブソナーつまり音響測深によるもの。これはいわば人間の五感のうち耳だけに頼っていることになる。しかし、第2次世界大戦の後半アメリカが開発して実戦に活用し、ものすごい威力を発揮したのがレーダー。このレーダーは相手の姿を画面上に写し出すものだから、いわば人間の五感のうち目の役割を果たすことになる。

この映画のポイントとなる「ローレライシステム」とは、いわば水中にある潜水艦に備えつけたレーダーと考えればよい。たしかにレーダーの開発自体は、アメリカだけではなくドイツでも、そして日本でもされていたもの。そして日本よ

りも基本的に技術力が優れていたドイツが、当時既にレーダーを開発し実用化していたとしても不思議ではない。そのレーダーを潜水艦が備えつけたとすれば……？　それまで耳しか持たないでモタモタと水中を航行していた潜水艦が突然目を持てば、その潜水艦が無敵の存在となることはまちがいない。そこで、その潜水艦につけられた名前が「魔女」。ここまでは理論的に十分わかるお話。しかし、ホントの「ローレライシステム」とは？　それは映画を観てのお楽しみ……。

映画で感動した後、小説も是非！

「映画が先か小説が先か？」あるいは「映画と小説のどちらが良かったか？」はよく語られるテーマだが、この質問は二者択一を前提とするもの。そしてこの質問に対しては、「やっぱり小説の方が良かった……」という答えが多いのが実情だろう。それはやはり、小説を読む中で広がるイメージの方が自由な想像力を刺激して人間に感動を与えるからだ。それに対比すると、２時間前後に制限された時間内で一方的に与えられるものを観るだけの芸術である映画の方が一般的に分が悪いのは当然か……？

しかし例外もある。その例外が生まれるのは、何といっても映画が映像とセリフ・音楽によって観客に与えるインパクトの強さによるものだ。これは、小説の比ではない。目や耳に訴えられた強いインパクトは永久に消えないといっても過言ではないほど強い印象と感動を与えることがある。その意味で、この『ローレライ』については、映画を観て感動することと、小説を読んで感動することの両方を是非体験してもらいたいものだ。前述したように、この小説を読むのは映画を観るほど楽ではなく、かなり難解な部分があることも事実だが、是非勉強だと思ってチャレンジしてもらいたい。それが、この企画を立ちあげその実現に努力してきた多くの関係者に対する最大の敬意の表し方だと思うから……。

時は1945年８月

「戦後○○年」を私のライフワークである都市問題やまちづくり問題における重要なテーマとしている私にとって、「戦後60年」の節目にあたる今年2005年は大きな意味のある年。そんな今年、福井晴敏原作の『亡国のイージス』とこの

『ローレライ』が公開され、多くの日本国民に「あの戦争」を考え直すチャンスが与えられることを率直に喜んでいる。

この『ローレライ』で描かれる時代は、1945年８月。1945年８月６日は広島への原爆投下の日、８月９日は長崎への原爆投下の日、そして８月15日が終戦（敗戦）の日であることはあらためて言うまでもないが、これらは日本国においてはきちんとおさえておくべき重要な日。「ローレライシステム」を積んだ伊507が横須賀を出航したのは、広島へ原爆が投下された翌日である８月７日。日本帝国海軍がかつて世界に誇った「連合艦隊」は既に壊滅し、片道だけの燃料を積んで沖縄への特攻作戦（天一号作戦）を挙行した戦艦大和も既に４月７日早朝からのアメリカ空母からの艦載機の攻撃によって14時22分大爆発をおこして沈んでいた。したがって、伊507の出撃はただ１船のみの単独行動。果たしてその行き先は？そしてその任務は？

第３の原爆投下を阻止せよ！

大日本帝国の「終戦処理」に向けての、政府首脳や陸海軍上層部の「せめぎ合い」は、1960年代の日本映画の名作である『日本のいちばん長い日』（67年）や『激動の昭和史　軍閥』（70年）で見事に描かれている。コトをおこすよりも、敗戦処理をどのようにこなすかの方がよほど難しいことは昔からの通例。ましてや日本は、かつて１度もそんな経験をしたことがない国だったからなおさらだ。そんな日本の「無条件降伏」に向けたスピードを１歩も２歩も加速させたのが、その是非は別として、広島・長崎への原爆投下であったことはまちがいない。したがって、「もっと早く無条件降伏を決断していたら、あの悲劇はなかったのに……」というのも正しいし、「８月15日に決断していなければ、第３、第４の原爆が……」というのも正しいだろう。そして、これらの歴史上の「イフ……」は、「もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったら……」の例えと同じで全く意味のないものだが、やはりどうしてもそんなことを考えてしまうもの。

この『ローレライ』のテーマは「東京への第３の原爆投下」であり、伊507の任務は「東京への第３の原爆投下を阻止せよ」というものだ。その任務遂行の頼りは「ローレライシステム」のみ。特攻作戦にトコトン反対した伊507の艦長で

ある絹見真一少佐は、優秀な潜水艦乗りだったが、出世コースからはずれたいわば「はぐれもの」。そして、もはや「死に体」となっている日本帝国海軍には、まともな乗務員を正規にそろえる能力もない。そんなはぐれもの艦長が率いる伊507の乗務員たちは、それぞれどんな思いでこの任務に立ち向かったのだろうか？　私は戦争を美化するつもりは毛頭ないが、そんなギリギリの極限状態におかれることによってはじめて人間としての本質や価値が見えてくることがあるのも事実。だから映画は面白い……？

「事件」勃発は8月10日

この映画を理解するためには、誰がどんな権限にもとづき、どんな命令を下したのか？　そして、その指揮命令系統は、終戦直前の混乱期にある政府や軍上層部において正当なのか否か？などを正しく理解する必要がある。しかし残念ながら、その点は2時間余の映画の中だけでは十分観客に説明しきれない感がある。それを理解する上でキーパーソンになるのは、伊507へ出撃命令を下す海軍軍令部第一部第一課長である浅倉良橘（堤真一）。彼の知能と戦略がこの映画の面白さの基本となっている。ところが……？

8月7日早朝、横須賀を出航し、米太平洋艦隊との戦いを経ながら目的地に向かっていた伊507艦内では、8月10日午後1時「ある事件」が勃発した。その事件とは？　それは、まるであのロシア革命の引き金となった「戦艦ポチョムキン事件」に匹敵するほどの大事件！　果たしてあなたは、映画の中で展開されるこの大事件の真相をきちんと理解できるだろうか……？

第3の原爆投下まであと○○時間！

「大事件」の処理が完了した後、絹見艦長の人間性が如実に表れるシーンが展開される。そしてここらがこの映画の泣かせどころ……？　その結果、絹見艦長や乗組員たちが選択した道は……？

アメリカ占領下のテニアン基地にある飛行場から、東京に投下される原爆を積んだB‐29が飛び立つのは8月11日の午前6時30分。それまでの時間はあと13時間。そこから始まる絹見艦長以下伊507の乗組員そして謎の少女パウラの活躍が

この映画のハイライトだ。この手に汗握る米太平洋艦隊との戦いを描くハイライトシーンは、誰が観ても理解できるし楽しい（？）ものだが、私としては、そのハイライトシーンに至るさまざまな出来事や意味合いを十分理解してもらいたいと思っている。しかしとにかく、あと○○時間、あと○○分そして遂にあと２分。そして最後の秒読みは……？

ウチの息子は軍事オタク

私事ながら、昨年11月司法試験に合格した私の長男は、もちろん司法試験のための勉強はしていたが、中学生頃から変な趣味が多く、その１つが「軍事研究」。その結果今や完全な「軍事オタク」となっており、さまざまな「その方面」の雑誌を定期購読してその方面の研究を続けている。そのうえ「軍歌」を聴くのが大スキという変なヤツで、カラオケでも堂々とそれを歌っている……？　しかし、昨年のイラクへの自衛隊派遣の現実化や昨年12月26日に発生したスマトラ沖大地震と津波の被害に対する被災地支援のための自衛隊派遣の姿などを見ていると、自衛隊の存在とそのあり方という問題が今後大きなウエイトを占めてくると予想される。そんな中、日本の軍事問題をまじめに勉強していることを前提としたうえで、法律専門家（弁護士）として一定の責任ある発言をできる人は、今はほとんどいない状態。アフガン戦争やイラク戦争になると、突如「軍事評論家」と称する人たちが連日テレビに登場するが、ノド元を過ぎれば忘れられてしまうのがその実態。北朝鮮からのミサイル問題も現実的な問題となっている（？）昨今、「ミサイルの脅威とは？」「ミサイルを撃ち落とすシステムとは？」「シェルターの効用とは？」「それらに関連するさまざまな法的問題とは？」、そういう問題を考える必要性は今まではなかったし、むしろタブーとされていた。しかし今後は意外とそのニーズが増えるのでは……？　そう考えると、私が弁護士として都市問題をライフワークとしてきたように、ひょっとしたら息子も、弁護士登録をすることができたら、その後のライフワークが軍事研究になるかも……？

伊 - 507解体 FILE を見よう！

パンフレットでは、見開き２頁の大判で「戦利潜水艦　伊 - 507解体 FILE」が

紹介されており、これはこの映画を理解するうえで貴重な資料。映画では、さまざまな人間の心の葛藤や戦闘シーンを含めるさまざまなストーリーが描かれていくので、それだけをフォローすれば十分楽しむことができる。しかし小説では、潜水艦を操作するについてのさまざまな技術論や指揮・命令系統のナマの姿が描かれるから、それを理解するためにはある程度正確な知識をもつことが必要だ。このパンフレットの「伊‐507解体FILE」における「イ号原稿」は松田孝宏氏によるものとされており、そこに書かれてあることは私が読んでも興味深いもの。きっとこの松田孝宏氏も軍事研究家の1人なのだろう。是非パンフレットを購入して詳しく勉強してもらいたいものだ。

今年は福井晴敏原作の映画が一挙3本公開

2005年初頭を飾る日本映画の話題作は、何といっても吉永小百合の111本目の出演作となる『北の零年』だった。しかし今年の日本映画の話題を集めるのが、福井晴敏原作の映画であることはまちがいない。それはこの『ローレライ』を含め、福井晴敏の小説を原作とする『亡国のイージス』さらには『戦国自衛隊1549』の3本が今年一挙に公開されるからだ。1年間で一挙に3本も同じ作家の小説が映画化・公開されるのは異例。しかも注目されるのはそのテーマが戦後60年を迎えた日本に「あの戦争」をあらためて考えさせ、そして現在の日本の危機を考えさせる内容になっていること。2005年1月3日付産経新聞はこの福井晴敏氏と報道カメラマンの宮嶋茂樹氏との対談を大きく掲げたが、そこで語られている内容は興味深い。是非読んでもらいたいものだ。

日本映画は一時の「どん底」状態を脱し、かなり元気になってきた。もっともそれを牽引するのがアニメ映画と日本版ホラー映画というのは少し残念だが、黒木和雄『父と暮せば』、山田洋次『隠し剣　鬼の爪』、崔洋一『血と骨』などのオーソドックスな大作・話題作の他、昨年大ヒットした行定勲『世界の中心で、愛をさけぶ』をはじめ、矢口史靖『スウィングガールズ』、中島哲也『下妻物語』など新感覚の純愛モノや青春感動映画が次々と登場しているのは心強い感じ！
今年も次々と登場するはずの元気な日本映画の中でも福井晴敏原作の3本は注目作。是非お見逃しなく！　2005(平成17)年1月27日記